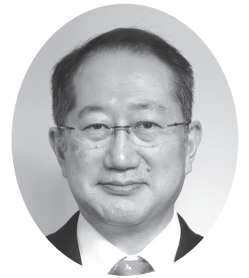


令和7年度

# 鹿児島県教育

12月号

## 巻頭言



### 指導から支援へ

一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会高等学校長部会副部会長

鹿児島県立甲南高等学校  
宮田 俊一

甲南高校では、令和二年度より教育実践テーマに「自走」の言葉を掲げ、生徒が自ら考え行動する力の育成に取り組んできた。しかし、依然として職員の指導や指示を待つ生徒も多く、十分な成果が得られているとは言えなかった。そこで今年度は、教育実践テーマを「指導から支援へ」潜在能力を引き出し、自走する生徒の育成」とし、「指導」に重きを置く現状を改め、自分で考え行動する生徒を「支援」する体制に移行することにした。

この方針に基づき、学校組織を根本的に見直した。生徒指導部は生徒支援部へ、進路指導部は進路支援部へと名称変更し、各部の係も見直した。生徒支援部に新設した教育支援係には、特別支援学校の勤務経験を持つ教諭を配置し、生徒支援室に常駐させるようにした。さらに、生徒支援室の隣に多目的教室を設け、不登校等の生徒の受入れ体制も整備した。

今年度の生徒支援部の目標は、「生徒一人一人が社会の中で自分らしく生きる存在へと、自発的・主体的に成長する過程を支援すること」とした。授業や学校行事を通して、生徒が悩みや課題に向き合いながら、自ら考え行動できるように支援しているところである。そのため、特別支援教育や教育相談に関する職員研修や事例研究も継続的に実施して

いる。

生徒支援部の組織見直しに先立ち、校則を改正した。生徒自身が甲南生としての誇りと自覚を持ち、常に自ら考え行動できるよう細かすぎる規則を廃止した。また、夏場に酷暑が続き、教室の空調が効きづらい状況もあったので、体調管理のため登下校や授業において、制服以外の暑さを凌ぎやすい服装の着用を試行した。校則の見直しや夏場の服装を通して、生徒自身が主体的に考え行動できるように取り組んでいる。

今年度の入学生から、合格者集合時に「中学校・高等学校間の情報引継ぎに関する希望調査」を行い、三月中に関係の中学校から必要な情報提供を受けた。四月の入学式までに一学年の関係職員で情報共有し、入学後は担任と教育支援係が連携して支援に当たっている。

進路支援部でも、生徒が深い自己理解に基づき、主体的に課題を発見し、選択・設定した目標の達成のために自己指導能力を獲得できるように支援することを目指し、課外授業や実力考査の在り方を見直している。

今後、生徒が真に自走できる力を身に付けられるように、支援の在り方を更に研究・充実させていきたい。

令和7(2025)年 12月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

## \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



## 随想



### 子供たちの非認知能力の育て方

べんきようしつモンシエリハウス代表 森 脇 里 美

「非認知能力が重要」と言われる今の子供たちにとって必要なことは何でしょう。

はじめまして。私はモンシエリせんせいと申します。「べんきようしつモンシエリハウス」のせんせいです。ここには小・中学生が通ってきます。毎日学校の宿題をし、加えて国語・算数などの自学自習をがんばります。一斉授業はありませんので一般的な学習塾には当てはまらないと思います。モンシエリハウスは「べんきようしつ」です。

勉強が終わったら保護者の迎えが来るまで自由に過ごします。外には烏骨鶏の飼育小屋や畑があり、子供たちは畑を走り回ったりして自由に遊びます。しかし、学童保育という枠には入らない気がしています。

また、週一回は英語のレッスンをしています。英語を楽しむことを第一に、自分の力で英語学習ができる礎を作れたらと考えています。しかし、英語塾かと言われると、それだけではないと思っています。

夏休みには、糸かけ曼茶羅やマクラメ編み、ダイヤモンドアートなど、細かくて時間のかかる工作をします。そのような工作教室だとも言えるかもしれません。

モンシエリハウスには保護猫たちが暮らしています。勝手に住み着いたマール。近所で迷子になっていたキャハメル。遠い地から預かることにしたブランに、ブランが来た日になぜか

モンシエリの庭にいたノワール。合計四匹の猫たちが暮らしていますが、子供たちも自由に触れ合うことができ、保護猫施設のようなでもあるかもしれません。

このように、「べんきようしつモンシエリハウス」は、学習塾・学童保育・英語教室・工作教室・保護猫施設などバラエティに富んだ顔をもっています。

モンシエリハウスを始めて約二十五年になりますが、モンシエリハウスを始めた当初から変わらないモットーがあります。それは「学習とは結果ではなく過程」だということです。どうしても結果や点数を重要視しがちな風潮がありますが、本来「学習」というのは「過程」を指すものだと考えます。

また、「机の上だけが子供の学びの場ではない」という思いももち続けています。畑にスナックエンドウが実る時期には子供たちに収穫を手伝ってもらったり、烏骨鶏の蹴爪を切るのを手伝ってもらったりもします。猫たちの避妊去勢手術費用は子供たちに手伝ってもらい、観葉植物を販売して稼ぎました。さらに、夏休みの最後の日には「水ふうせん祭」が定番イベントです。水ふうせん二千個をみんなでぶつけ合います。二千個の風船の準備は子供たちの仕事です。遊んだ後の片付けも子供たちの仕事です。準備、後片付けともにとても大変ですが、それでも子供たちは毎年楽しみにしています。

#### 略歴

大学卒業後、二〇〇一年頃から薩摩郡さつま町柏原にてべんきようしつモンシエリハウスを設立する。机上の学習に限らず、日常のすべてを学習の機会と捉えて名称を「べんきようしつ」とする。毎日の放課後ならびに長期休暇中の子供たちの居場所づくりの役割を果たす。現在、さつま町の小学校の学校運営協議会にも関わ

このような机の上ではない、お手伝いやレクリエーションも子供たちには立派な学びになっていると考えます。

非認知能力が重要視されるようになった昨今。今の子供たちに本当に必要なものは何か。バラエティに富んだ日常。私はそれが今の子供たちに最も必要だと思います。毎日違うことに触れられるバラエティに富んだ日常があれば、自主性・やり抜く力・協調性・創造性・問題解決力など、非認知能力と言われるものがぐんぐん育つていくと考えます。

実際にモンシエリハウスに来ている子供たちは、帰ってきて真っ先に宿題を済ませた後は、その日の自学自習を自分で決めて取り組まします。それが終わったら「今日は何をして遊ぼうか」と考え、時にはみんなで鬼ごっこをしています。鬼ごっこの中でトラブルが起きたら自分たちで解決しようと話し合いをしたり、転んだ子がいれば水道で洗い流して慰めている様子もあつたりします。このように、モンシエリハウスに通ってきている子供たちにはバラエティに富んだ日常があり、非認知能力が培われていると感じる場面が多くあります。

毎日「ただいま帰りました。」と帰ってくる子供たち。「おかえりなさい。今日は〇〇するよ!」今日はハロウィンの飾りつけをみんなでする。今日、さつま町の小学校の学校運営協議会にも関わ



## 「働きやすさ」と「働きがい」の両立に向けて

平佐西小(北) 新田 賢一

### はじめに

「働きやすさ」がそのまま「働きがい」であるとは一概に言えない。このことは、令和六年度に行った本校教員(五十人)対象の調査結果から明らかになったことである。

「自分は幸せだと感じる人が多い」、「私は今の学校で成長できている」と回答した割合について、時間外在校等時間が月四十五時間未満の教員群より、そうでない教員群の方が高い結果となった(薩摩川内市が委託した民間会社の調査結果)。「働きやすさ」を時間外在校等時間の長短のみで判断することはできないが、一つの提起となる結果であった。令和七年九月に公示された改正給特法に基づく「指針」では、「教育職員の働きやすさと働きがいを両立し、学習指導要領等において目指されている理念の実現に向けてよりよい教育を行う」ことが明記されている。これは、「働き方改革を「働きやすさ」のみで捉えるのではなく、「働きがい」との関連で考える必要があることを示している。

本稿では、特に「働きがい」に焦点を当てて考察し、今後の学校経営において、「働きやすさ」と「働きがい」の両立を実現するための考え方を整理する機会としたい。

### 二 「働きがい」のある職場について

教職員支援機構フェローである愛媛大学大学院露口健司教授は、「働きがい」のある職場の条件は次の八つであると、その著書※1で述べている。

#### ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

① 教員に必要な学習機会が確保されている  
② 教員個々の職責の範囲が明確である  
③ 日常が新たな刺激に富んでいる  
④ 自分で仕事をコントロールできる  
⑤ 業務分担や人事評価が公正である  
⑥ 職務遂行に対してフィードバックがある  
⑦ 周囲の関係者からの日常的な支援がある  
⑧ 前向きな発言・行動をする教員が多い  
自分の学校経営を振り返ったとき、これらの多くが実現できているとは言いがたい。意識して取り組む必要性を再認識させられる。今回は、紙面の関係により、これら八つの中から①と⑦について補足したい。

① 「教員に必要な学習機会が確保されている」ことについて

「よい授業ができること」、「子供と良好な関係が築けること」等は「働きがい」と直結する。学びの専門職としての力量を向上させる機会の確保は大切なことである。校長としては、今後もキャリアステージに応じた研修奨励を積極的に行いたい。併せて、本校では「授業について語る場」と「一人一授業」を組み合わせた主体的な研修に取り組んでいるが、これからのOJTによる指導力向上の取組を継続したい。

⑦ 「周囲の関係者からの日常的な支援がある」ことについて

よき同僚性が「働きがい」につながることは当然であるが、学力向上、生徒指導の充実、服務規律の厳正確保等に至るまで、

チームで取り組むメリットを実感している。

校長として職場の同僚性を高める方法は多様であろうが、私は、適材適所を意識した校務分掌の工夫、一人一人への語り込みによる人材育成、ミドルリーダーを中心とした自走する組織づくり等が有効であると感じている。

### 三 「働きがい」と「負担感」について

先述の露口教授は、「働きがい」と負担感を区別しないまま、業務を一律に削減してしまうと、教員が働きがいを感じている業務まで削減してしまう恐れがある」と述べている。また、負担感を感じる業務としては、①何のために行うのか分からない(目的性の欠如)②いつ終わるのか分からない(限定性の欠如)③やらされ感が強い(主体性の欠如)④苦手な人と関わらなければならない(関係性の欠如)の四つに分類している※2。

これまで本校では、教材費等のキャッシュレス化、毎年行っていた研究公開の発展的解消、校務DXの推進、前例踏襲で続いている行事の見直し等を実施してきた。今後も働き方改革において、負担感を見極めながら総合的に判断していきたいと考えている。

### 四 おわりに

私は、日々、子供たちの笑顔から多くの元気をもらっている。国では、令和十一年度までに、教員の一か月時間外在校等時間を平均三十時間程度に削減する目標が定められているが、校長としては、これからも多くの「声」に耳を傾け、「働きやすさ」の取組を更に進めるとともに、「働きがい」の視点も強く意識しながら魅力ある学校づくりに取り組みたい。その実現こそが、これからの子供たちの笑顔につながるべく信じている。

※1 学校の「働きやすさ・働きがい」改革  
教育開発研究所 二〇二四

※2 「VIEW next」教育委員会版  
ベネッセ 二〇二二





## 同僚性の高い職場づくりについて

吹上中(日) 波戸 三幸

### 一 はじめに

同僚性の高さは、学校現場における大切な基盤である。校長として赴任した吹上中学校での実践を通して、私は強くそう感じるようになった。教職員同士が信頼し合い、支え合い、率直に意見を交わせる関係性があってこそ、どのような課題にも柔軟に対応し、乗り越えることができる。実際に本校では、同僚性の高さがさまざまな改革の原動力となってきた。具体的な取組を通して、同僚性の高い職場づくりについて示していきたい。

### 二 具体的な取組

#### (一) 同僚性を実感させる

まず重要なのは、「自校は、同僚性の高い職場である」と教職員自身が自覚できるような環境をつくることである。日々の協働や対話の中にある信頼や連携を、意識的に言語化・可視化することで、職場全体の雰囲気が前向きに変化する。

例えば、「入学式のしおりを教頭が一人で折ろうとしていた時、何を言わずとも、

職員室にいた職員が手伝っていてとても助かった」のような、小さな出来事も逃さず伝えることを心掛けた。

#### (二) 職員相互の信頼関係を重視する

さらに、適材適所の人員配置も同僚性を高める上で欠かせない。教職員の得意分野や個性を尊重し、それぞれの「良さ」を生かすことができる学年部の構成や校務分掌の配置に努めた。これにより、互いに補い合い、信頼し合える関係が築かれ、学年部としてあたりまえのように協働する雰囲気 が確立された。フレッシュ研修対象者の研究授業に多くの職員が参加したり、初めて担任をもつ二年目の教員への助言サポートがよく行われていたりするなどの行動が見られ、職員集団としての成長を感じている。

#### (三) システムを変える

前述したことをベースにした上で、教職員一人一人のアイデアを引き出し、それを実際の学校運営に生かす工夫である。個人との面談などの機会を活用し、学校運営(特に業務改善)に関するアイデアを募集した。

#### (四) 成果

実現可能なものについては、企画委員会で提案・修正し実現していった。実践例として、部活動ごとに副顧問の日を設け、顧問の負担を少なくする取組などがある。提案を歓迎する風土をつくり、自由に意見を出せる場を設けることで、「自分の声が学校運営に役立つ」という実感から、更なる主体性と協働意識が育まれ、職場環境の好循環につながると感じている。

本校では、こうした同僚性の高まりを背景に、この一年で、次のような改革を実現してきた。

○学校教育目標の見直し

○家庭訪問の三者相談への変更

○民間プールを活用した水泳指導の導入

○新制服・鞆・補助鞆の採用

○部活動における副顧問の日導入

○生徒参加による校則(指針)の見直し

これらの取組の基盤は、やはり管理職と教職員の信頼関係を築くことである。管理職が教職員の声に耳を傾け、共に悩み、共に考える姿勢を持つことで、上下の垣根を越えた同僚性の高い「チーム学校」が実現できる。

### 三 おわりに

これらの取組は、いずれも教職員の協働と信頼関係があってこそ実現できたものである。今後も、同僚性の高い職場づくりを更に推進し、子どもたちにとって最良の教育環境を整えていきたい。



## 地域と連携した食農教育を通して 食に対する学びを豊かにする学校を目指して

高田小(南) 玉 泉 克 将

### 一 はじめに

本校は、周囲を田畑に囲まれており、自然豊かで農畜産業が盛んに行われている南九州市川辺町にある。子供たちに対する保護者や校区民の教育熱も高く、伝統的に食農教育を大切にしている。特に、総合的な学習の時間や生活科の時間での米作りや野菜作りでは、校区公民館組織である「たかた村づくり委員会」「たかた三世代塾」の皆さんの支援をいただき、人参・大根・桜島大根などの野菜や米を収穫でき、子供たちの生き生きとした姿が見られている。

### 二 学校経営ブランドデザインから

本校の学校教育目標は「たすけあう かんがえる たくましい 子供の育成」である。この目標を達成するための重点項目の一つに、「地域に開かれた学校づくり」を掲げている。食農教育を中心に、地域人材の積極的な活用を図り、公民館や三世代塾、村づくり委員会との連携を進めていくこととなる。その活動の中心になるのが、生活科や総合的な学習の時間に行う米・野菜作りである。

### 三 生活科・総合的な学習の時間から

生活科においては、トマト、ナス、ピーマン、スイカ、サツマイモ、桜島大根などの身近な

野菜を、土づくりから地域の方に学び、種まき、水撒き、収穫までの一連の作業を行っている。

総合的な学習の時間においては、田植えに備えての育苗用の土づくり(すなゆり)から種まきを経て、六月には保護者や地域の方と一緒に田植えを行う。その後、除草や稲の生育状況を数時間かけて学んでいく。

また、今年度から他校とのオンライン学習等により、学習の成果を発信・共有することも計画し、食についての学びを深めるとともに、地域のよさを実感したり、自信をもったりする児童の育成も目指す。

### 四 かがやきフェスタ(収穫祭)から

前述のような活動を通して、子供たちは、収穫した野菜を食べたり家に持ち帰ったりしながら、食の楽しさや大切さを感じ取っている。学びの集大成として、十一月にかがやきフェスタと銘打った収穫祭・感謝祭を行っている。保護者の協力のもと、収穫した野菜を使って豚汁等を作り、校区民や来場者に提供する。また、米や野菜を販売することにも挑戦し、来場者に声をかけるなど、交流も図られている。さらに、学習の成果として、一連の栽培活動をプレゼンテーションして、学び

の深まりを図っている。

### 五 学校と保護者・校区との連携の在り方から

教育課程に位置付けられた教育内容とはいえ、米や野菜作りを計画的・継続的に実施していくのは大変困難である。これには、地域の方の指導・協力が不可欠であることは言うまでもない。

年三回(四月・八月・十二月)各団代表が集まり、子供たちが育てたい野菜を伝えたり、土づくりや植え付けの日程、役割等を確認し合ったりしている。特に、かがやきフェスタにおいては、開催規模が大変大きく、役割分担の必要性が大いに問われることになったので、昨年度よりも役員会や全体会、校区団体との連絡会を充実させるなどしてきた。

### 六 おわりに

このような教育計画を通して、食の大切さや給食を残さず食べよう、高田小はすてきな、という意識が高まっている。

今回詳しくふれなかったが、これからも南九州市学校給食センターとの連携も大いに図っていききたい。食に関する指導や作成資料の提供(年二十回程度)、給食づくりの模擬体験、ビデオ「おいしい給食ができるまで」の視聴、物語給食などなど、栄養教諭に多くの支援・指導をいただきながら食の大切さを学んでいる。

本校は、令和七年度文部科学大臣表彰「学校給食表彰」を受賞した。今後も、学校・校区・関係機関等と連携しながら、食に対する学びを豊かにする学校を目指して努力していきたい。



## 地域と共にある学校を目指して

泰野小(隅) 飛松正文

### 一 校区の概要

本校は、志布志市松山町のほぼ中心に位置し、宮田山、霧岳の二つの山と田園に囲まれ、自然豊かな環境にある。また、やっちくふれあいセンター、泰野地区公民館、松山中学校や特別養護老人ホーム、個人の天体観測所等があり、施設も充実している。

本校区は、校区コミュニティ協議会を中心に、青少年保護育成活動も盛んである。PTA活動も積極的であり、学校のエducational環境づくり、授業参観や学級PTA等の参加率も高く、教育に対する関心が高い。また、平成二十九年度から学校運営協議会を発足し、熟議を重ね、さらに、地域とともにある学校づくりに努めている。

令和七年度は、一・二年生、三・四年生の複式学級二年级と五年生、六年生の単式学級二年级、知的、情緒、肢体不自由の特別支援学級三学級の合計七学級、全校児童三十九人、県費職員十一人、市費職員二人、計十三人の職員が配置されている。

### 二 学校教育目標

自ら考え、自ら学び、豊かな心をもち、た

くましく生きぬく力を備えた泰野の子供を育てる

### 三 泰野校区のよさを生かした体験活動

#### (一) 豊かな自然を生かした体験活動

本校の稲作体験活動は、高学年が年間を通して行っており、例年、六月に田植え、十月に稲刈りと掛け干し、十一月に脱穀、十二月に餅つきを行っている。どの活動も校区コミュニティ協議会の方々が中心となつて進めてくださっている。

田植えや稲刈りでは、子供たちも機械を操縦させていたがながら行い、その後、手作業の体験をする。脱穀では、子供たちが足踏み脱穀機と唐箕を使って脱穀作業をする傍らで、地域の方々がコンバインを使って脱穀をするといった、昔ながらの作業と現代の作業をミックスして行われている。

#### (二) 地域の人材を生かした活動

稲作体験活動のほかに、十一月の県民週間には、低学年は昔の遊び、中学年は竹水鉄砲作りと、全学年が地域の方々とふれあひながら体験活動を行っている。また、地

### 四 伝統的な活動

域の方による租税教室や天体観測会等も協力していただいている。

泰野校区には早鈴神社があり、毎年三月に「だご花」の奉納を行っている。地域の方々の指導を受けながら、中学年が紅白のだごを、高学年がだごを刺す竹串をけずって、竹串にだごを刺し、だご花を作っている。

### 五 学校運営協議会の充実した活動

学校運営協議会の活動も充実している。学校経営案やランドデザインの承認はもちろん、校区コミュニティ協議会長が学校運営協議会長も務めてくださっているおかげもあつて、先に紹介した様々な体験活動もスムーズに行うことができる。

さらに、地域の教育力向上のために、昨年度から、地域の方々にも子供たちの教育の一端を担っていただく持続可能な取組ができなしか熟議を重ねた。その結果、次の三項目の声掛けの依頼を、学校運営協議会から地域の方々へ行うことができた。

- ・ 自分から進んであいさつをしようね。
- ・ 友達と仲良くしようね。(人の嫌がることは言わないよ。)
- ・ 時間を守ろうね。

このことは、本校の学校運営協議会の自主的活動に繋がっていく大きな第一歩だと言える。

今後も、更に学校運営協議会等の充実に努め、学校教育と共に、泰野校区の教育力向上を図り、泰野っ子の健全育成に努めていきたい。



## 子どもの心を育てる言葉の力 ～俳句・詩・作文を生かした表現力育成の取組～

向陽小(市) 内 蘭 博 之

### 一 はじめに

情報化・グローバル化が進む現代社会において、子どもたちに求められる力は、知識の習得だけではない。自己の考えや感情を的確にとらえ、論理的かつ創造的に他者へ伝える「表現力」は、これからの時代を生きる上で重要な資質である。

本校では、「思考力・判断力・表現力等」の中でも特に言語活動を通じて育まれる「表現力」の育成に力を入れている。なかでも俳句や詩、作文といった短く凝縮された言葉による表現活動は、子どもたちの内面を豊かにし、言葉への感受性やコミュニケーション能力を育む上で非常に有効である。そこで、本校ではこれらの表現活動を教育の中心に据え、学校全体でその育成に取り組んでいる。

### 二 取組の実際

#### (一) 俳句づくりで思考力を鍛える

毎月「言葉の日」を設け、子どもたちは日常の風景や感動を題材に俳句をつくっている。各学年の優秀作品は校内に掲示している。俳句づくりでは、限られた言葉で思いを伝える「凝縮の思考力」が鍛えられ、季語や比喩などの表現技法に触れることで、古典的な感性にも親しむことができている。

#### (二) 詩で心情を言葉にする力を育てる

日常の気付きだけでなく、体験活動や音楽・図工などの学習を通して感じたことも詩に表現している。自分の内面にある感情や情景に向き合い、言葉にする過程を重視している。さらに、友達作品を読み合い、作者の思いをくみ取ること、他者の表現への理解と共感も深めている。

#### (三) 作文で論理と個性を磨く

国語科では「説明文」「意見文」「感想文」など、目的に応じた作文の型を段階的に指導している。読書感想文では、あらすじではなく、読書を通じて生まれた心の変化を論理的に表現することに重点を置いている。また、比喩や語彙を活用した個性的な表現を積極的に評価し、子どもたちが表現する楽しさを感じられるようにしている。さらに、地域課題の解決や社会との関わりをテーマにした作文にも取り組んでいる。

### 三 おわりに

これらの活動は国語科にとどまらず、全教科に共通するテーマである。表現力の育成は、「何を学び、どう考えるか」といった学びの質を高めることにもつながる。

私は校長として、子どもたち一人一人の着眼点や表現を尊重し、「多様性」を認め合う姿勢を教員に促してきた。国語科に限らず他教科とも連携し、職員間で表現指導のノウハウを共有する体制づくりにも取り組んでいる。

今後も子どもたちの内なる可能性を引き出し、自立した表現者として未来を切り拓いていけるよう、豊かな教育活動を推進していきたいと考えている。





## 「やればできる」を合言葉に

田代中(隔) 土岐 邦 寿

### 一 はじめに

本校は、平成十七年四月に旧田代中学校と大原小学校との統合によって創立され、今年で二十一年目を迎えた。生徒数は四十三人で、当分の間、四十人前後で推移する。田代地区は周りを山に囲まれた里山で、農業(特に畜産関係)が中心である。地域全体で子どもたちを見守り、育てようという気風があり、教育活動にも大変協力的である。今回は、本校学校自慢の一つである「TJK」の取組を紹介する。

### 二 取組の実際

#### (一) 「TJK」とは

田代中学校における総合的な学習の時間で中核をなすのが「TJK」(田代自己課題追究)である。五年目の取組となる。三学年合同異年齢集団の活動で二十八時間設定である。大テーマは「田代にある課題を見つけ解決しよう」。四月に一人一テーマで設定し、五か月かけて研究・分析し、九月末の発表会でプレゼンテーションを行うというのが大きな流れである。

#### (二)

ア 町役場とi club(一般社団法人)の全面協力

i clubは錦江町アントレプレナーシップ教育事業の一環として派遣してもらっている。詳しくは検索していただきたい。サポート内容としてはテーマ設定のアドバイス、地域取材や観察・調査時の移動手段確保、中間発表時の相談窓口などである。

イ 全職員がサポート役

テーマが決まるまでに外部講師の講話を聞いたり、初期グループで田代について討議したりするが、決定後は分野別に再編する。グループとしては特産品、昆虫、植物研究、料理、地域調査、制作などである。今年は四十三テーマを七グループに分け、全職員がいずれかのグループに所属し、一緒に研究していった。

ウ まとめ取りの日を設定

「一日TJKの日」が二回あり、生徒は計画に従って、理科室や調理室、図書室などを使ってテーマ探究したり、町の図書館で調べ物をしたり、農家や商店街

にインタビューに行ったりしている。エ タブレットの活用

i Padとロイロノートを使って、情報の管理と研究・調査の進捗状況把握をしている。また、発表時間が決められているので、アプリを最大限利用してプレゼンテーションを作っている。今年は配布資料をキャンバで作成していた。

#### (三) 評価と広報

七月の中間発表は、グループ毎に行い、生徒、学校職員、役場職員、i clubの助言を大切にしている。夏季休業中に研究を続けるが、家族のサポートも心強い。九月に入るとプレゼンテーションの制作、発表原稿の作成、発表練習などを行っていく。必ず毎時間、振り返りと評価を行う。発表会は、一人四分程度のプレゼンテーションとその後生徒のコメント記入一分が割り当てられており、計二百分の長丁場となる。地域にも広く広報し、保護者や親族、教育関係者や町広報・報道各社にも参観してもらっている。優秀作品は、校内文化祭や町文化祭大ホールでの発表も組まれ、多くの町民に聞いてもらっている。

### 三 おわりに

毎年、生徒の斬新なアイデアや着眼点には驚くばかりである。一人一人を見ると器用にこなす子もおれば、失敗ばかりしてなかなか進まない子もいる。共通して言えることは、発表後、生徒が大きく成長したと感じられることである。子どもたちが将来、社会人となり問題解決しなくてはならない場面に出合ったとき、TJKが役に立つのではないかと感じている。



## 心に残るひとこと



### 廊下の壁のペンキを

塗りがえましよう。

輝北中(隅) 堀内 隆 史

私が管理職になる前、教諭時代最後のA中学校は、自分の指導力のなさを痛感し、指導の在り方を根底から変えさせられた学校となった。それまでの私は、古い生徒指導のやり方で、改訂された生徒指導提要にある生徒に寄り添う指導になっていなかったと今では思う。当時のA中学校は、喫煙・暴力等の大きな問題行動を抱えた生徒指導困難校であり、特に最後の三年間関わった学年は、一年生の三学期に学級崩壊状態に陥り、二年生に進級してからは全てのクラスにも波及し、二学年三クラスが授業も成り立

たないような状態に陥ってしまった。他の学年にも応援を頼み、廊下には不測の事態に備え教員がスタンバイしている状況だった。帰りの会の時に騒がしくなったクラスに入ってみると、教室内を配布物で作った紙飛行機が乱舞しているときもあった。連日生徒指導部を中心に、学年全体で対応を協議したが、打つ手全てが空回りし、暗いトンネルの中をさまよっているような状況が一学期中続いた。

そのような状況の中で迎えようとした夏休みの前に学年主任のS先生からある提案があった。「夏休みになったら二年部職員で廊下の壁を真っ白に塗りがえませんか。生徒が登校してきたとき新鮮な気持ちになれるようにしませんか。」というものだった。「やりましよう。」即決だった。そして、真夏の暑い中、汗をだらだら流しながら、黙々ときれいに塗りがえていった。二学期登校してきた子どもたちから廊下の壁がきれいになっていることを口にする声がたくさん聞こえてきた。すぐに状況が変わるわけでもないが、少しずつ変わっていくような気がした。暑い中ペンキを塗りがえたことは無駄ではなかった。あの日の晩、学年の職員で飲んだビールの味は格別なものだったことを忘れるはしない。

子どもたちは、三年に進級して、皆変わった。全ての取組に前向きに取り組む最高の学年集団に生まれ変わり、巣立っていった。三年程前、呼ばれた成人式に参加し、立派に成人した子どもたちの姿を見ることができたときは教員冥利に尽きる思いだった。

### 楽しまんといかんど

与論中(大) 吉松 浩志

これは、私が校長として初めて赴任した昨年の春、赴任して数日後の夜に、知り合いの先輩校長から電話でかけられた一言です。

初めての校長職という重責、そして、見知らぬ学校、職員、生徒、地域。不安と期待が入り混じり、「これから、どうやって学校を動かしていこうか・・・。」と、文字通り右も左も分からない状態に、責任感が重くのしかかるそんな時に、先輩校長が「(学校経営を)楽しまんといかんど。」と、さらりとおっしゃったのです。その瞬間、張り詰めていた心がすっと緩み、腑に落ちました。

生徒や保護者、地域の方々とこれから築く関係。期待とともにあった大きな不安を打ち消し、

この言葉は私に、まず自分から前向きになる姿勢を与えてくれました。自分が心から楽しむことで、その明るさや意欲が周囲にも伝わり、自然と学校全体が前向きな雰囲気になると確信できたのです。

以来、私はどんな仕事にも「楽しむ」という姿勢で臨んでいます。もちろん、学校経営には避けて通れない困難や、壁に直面することもあります。しかし、この言葉を思い出すたびに、良い意味で肩の力が抜け、樂觀的な気持ちで物事に取り組めるようになりました。

ここでいう「楽しむ」とは、決して無責任に気楽にやるということではありません。それは、与えられた使命に対し、意欲的に向き合い、その過程を味わい、乗り越えることを楽しむ心の余裕を持つことです。この前向きな姿勢こそが、結果として困難を乗り越えるエネルギーとなり、毎日を充実感で満たしてくれるのです。この「楽しまんといかん」というひとは、今でも私の心を支えてくれる羅針盤です。

## 啐啄同時<sup>そつたく</sup>

串木野特支 谷村 真由美

この言葉を初めて聞いたのは、大学時代のある講義だった。「啐（そつ）」は、ひなが卵から出ようとして内側から殻をつつくこと、「啄（たく）」は、その音を聞いた母鳥が、ひなのふ化を助けるために外側から殻をつつくことを意味する。子供たちとの関係のありようを示す、なんとも温かく優しい言葉として、現在に至るまで大事にしている。

この関係性を実現するためには、両者に様々な姿勢やスキルが必要となる。教師については、指導・支援の柔軟なレパートリーはもちろんであるが、その前に子供の「今」のタイミングを逃さない研ぎ澄まされたまなざしと耳、心、根気よく「待つ」姿勢、学びたいなどの思いそのものを育む働き掛け等。子供については、願いや夢、それを教師に伝えたいという意欲や手段をもつこと等。そして何より、両者の信頼関係があつてこそということは申すまでもない。

ところで、「啐啄同時<sup>そつたく</sup>」の言葉とともにいつも思い出されるのは、初任校小学部でのMさん

とのこと。教師として未熟な私は、発語や身振りでの意思表示の未発達な段階のMさんの「つき」への気付きに悩んでいた。特に難しいと思ったのが、「NO」の気持ちや、SOSの表明である。関わりに、いつも穏やかな笑みを返す（と私は受け止めていた）Mさん。懸命に伝えていたであろう、嫌だ、困った、助けてほしいなどの思いを見逃していたかも知れない。関連して、ネガティブな内面への気付きは、生徒指導の面でも重要である。二軸三類四層の構造的な生徒指導により、全ての子供たちについて必要な指導・支援のタイミングを逃さない大人により丁寧な姿勢が求められている。

ときは経過し、今は校長として、子供たちから学び、機を逃さない姿勢を伝えている。では、自分自身は教職員一人一人の願いやSOSにどれだけ気付き、答えられてきたのか。「啐啄同時<sup>そつたく</sup>」の言葉を今一度かみしめながら、残りの校長生活悔いなきよう過ごしていきたいと思っている。

## ある日の校長講話



当たり前のことを

当たり前に行うことの大切さ

西始良小(始伊)下 吉 靖 孝

みなさん、おはようございます。みなさんは、広報紙アイラビュー一月号を読みましたか。六年生の〇〇さんの新年の抱負が載っていました。それは、「絶対、健康!!」です。確かにそうだと思います。健康でなければ、やる気も湧いてきませんよね。また、その紙面の中に、「凡事徹底」という言葉がありました。山田中の〇〇さんの抱負です。校長先生も好きな言葉の一つです。

改めていい言葉だなと思ったのは、三年前の、全国高校サッカー選手権大会準決勝、熊本の天津高校対京都の東山高校の試合中です。試合の方は、一対一の時点で、惜しくもPKで天津高校が負けてしまいましたが、見たえのある試合でした。アナウンサーから、天津高校サッカー部の部訓「凡事徹底」という言葉が、紹介されました。その意味は、「当たり前のことを当たり前に行う」ということです。部員の方がインタビュを受け、あなたの凡事徹底は何ですかと聞かれ、こう答えました。「明るく元気に挨拶をすることです。」と、笑顔で答えていました。インターネットで、天津高校サッカー部を調べてみると、凡事徹底の下に、さらに五つの規則というものがありません。一点目が「挨拶の徹底」、二点目が「学校生活の充実」、三点目が「礼儀」、四点目が「ルールを守る」、五点目が「正しい努力の継続」です。どれも日頃、親や担任の先生方から言われていることですが、特に一点目から三点目は、サッカーには直接関係のない、家庭や学校生活の中で身に付けないといけない内容です。一人一人が上手になる。チームが強くなる。そのためには、部員一人一人がサッカーの技術以前に、人として

やらなければならないことが当たり前にできないと、一流のサッカー選手にはなれないということでしょう。因みに、天津高校サッカー部出身でJリーガー選手は、五十人以上もいるそうです。

凡事徹底、「当たり前のことを当たり前に行う。」みなさんも実践してみてくださいね。

円小学校の『円』は、幸せが満ちる器であり、

つらさも乗り越えていけるみんなの輪

円小(大) 川 良 貴 幸

私たちの円小学校は、円集落にあります。この「円」という名前には、どんな意味があるか知っている人はいますか。私は、とても興味があったので、区長さんや町議員の方に尋ねてみたことがあったのですが、これという決定打はありませんでした。大昔は、文字が無く、会話でのやりとりが中心だったので、話し言葉に後から文字を当てたことから、それほど深い意味



は無かったのかもしれませんが。

「円」という文字の成り立ちを辞書で調べてみると、器のきれいな口の形を表しているようです。そこから想像を膨らませると、この集落は、北方の海に向かって開けていて、東西を大きな山々で守られているような地形になっているので、ちょうど縦長の器を海に向けて、横置きにしているような形になっています。

私たちは、この円集落で、毎日、生活し、学び、運動をして、少しずつ成長し、前進しています。それが、人々の力となり、喜びとなります。まるで大きな器に、おいしくて栄養のある飲み物やスープが、一滴、一滴、少しずつ溜まっていくようなイメージです。

いろいろなお祝いの時には、よく乾杯をしますが、この円では、その時に、それまでの多くの努力や協力の結果としてのみんなの喜びや幸せもいっしょにかみしめているのだと思います。

また、この円の別の読みの「まる」の形は、そんなみんなの繋がりのようにも見えますし、でこぼこ道でも引っかかりからず、前へ転がっていく元気に弾むようなイメージも浮かんできます。これからも円のみんなが、奄美の魂である

結の心で繋がり、つらい気持ちも回転しながら笑顔に変えるすばらしい円集落、円小学校でありますようにと願っています。



## 即動力

国分高 石谷 洋一

今日は、芸能とビジネスなど、多方面で活躍されている元ロンドンブーツ1号2号の淳こと、田村淳さんの『即動力』という言葉や、皆さんに紹介します。この『即動力』という言葉は、田村さんの著書のタイトルにもあり、田村さん自身が使われている造語のようです。

私がこの言葉を知ったのは、以前、宮崎県串間市で田村淳さんの講演を聴講したことからでした。九十分の講演でしたが、話の内容にすぐに引き込まれてしまいました。

田村さんは、自らがHSP（視覚や聴覚などの感覚が敏感で、刺激を受けやすいという特性を持つている人）の中のHSS型（内向的な性格なのに刺激を求めてしまう、どこか矛盾した

気質）であるということを、お話されました。実際に、小学生の時の彼は、引っ込み思案、あがり症、泣き虫でありながらも、思い立ったら、すぐにスポーツや習い事を始めるといった行動を起こしていたといいます。そして、行動を起こしたことで、周囲に対する気遣いを覚えていったと、話をされました。

田村さんは、四十歳を過ぎてから法学に興味を持ち、青山学院大学を受験しますが、不合格となります。しかし、不合格通知を受け取って六時間後には、新たな目標を定め、行動を起こし、慶応義塾大学通信課程に合格、さらに、自ら学びたいテーマの研究に専念したいと考え、一年後には慶應義塾大学大学院を受験し、見事に合格、二〇二一年三月に修士課程を修了しています。

講演の中で、『悩みや迷いがあっても一歩動けば見える景色が変わる。』『失敗は恐れる必要はない。問題に気が付くのだからもっと上手にいくチャンスだ。』という言葉がありました。行動を起こせば、出会いやコミュニケーションの場面が生まれるはずです。それは、自分の才能や可能性に気付くチャンスでもあります。皆さんも『即動力』で、新しい自分を発見し、